

自己肯定感を高め、社会認識を深める授業改善の試み

—アクション・リサーチの視点から—

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
国塚 雄樹

1 研究主題設定の経緯

(1) 小・中の社会科の接続の問題

筆者が中学校1年生の社会科の授業を担当するのは4度目である。都道府県の位置や名前、歴史上の主要人物の名前や業績など、知識の定着が進んでいない状態で入学してきている生徒が年々多くなってきている。中には極度の社会科嫌いまでが増えてきている。そのような実感から授業改善を毎年進めている。

2007年にベネッセ教育研究開発センターの調査では、小学校の教員の50.8%が「指導が苦手という教科」として社会をあげていた⁽¹⁾。このことから教授する方にとっても社会科は何を教えるのか、どのような社会認識を育むのか現場での混乱があるようである。

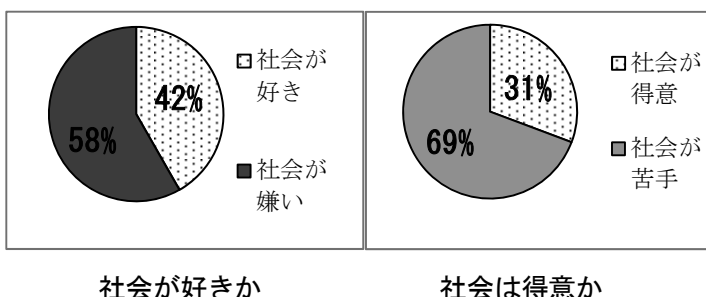
北俊夫(2011)は社会科授業の教授の難しさを「学習指導要領が法的拘束力をもつとはいえ、社会科に関して言えば記述が少なく、現場主義の考え方が流れている。そのため、指導内容の重点化・明確化、教材開発、単元構想は一人一人の教師に委ねられている。このことが教員の大きな負担となっている⁽²⁾」と述べている。

さらに、社会科が苦手になる時期は中学校1年生の早い段階ということが調査によって明らかになった⁽³⁾。小学校段階における調査においては「社会科が好きだ」「社会科の学習内容は分かっている」と答えた児童は各教科に比べて一番低い数値が出ている⁽⁴⁾。

本校の生徒の実態調査においても同様な傾向がみられる(資料1)。中学校1年生の4月の段階で調査をしたところ、「社会が好きだ」と答えた生徒は42%、「社会が得意」と答えた生徒は31%にとどまっており、筆者の実感が数値的にも表れた。

そこで、中学校社会科における授業改善を試み、生徒の社会科に対する苦手意識の克服と確かな社会認識を育んでいく必要性を強く感じた。

資料1 中1の生徒のアンケートより
2014 4/13 実施 128名



(2) 本校の抱える課題

本校は人権教育に力を入れて学校教育を行っている。しかし、生徒を見ると「どうせわからないから」と、授業中に臥せてしまい、学びの逃避をしている生徒も少なくない。さらに、授業中に主体的に活動するわけでもなく、教師の説明を聞き板書をノートに写すとい生徒が多い。そのため、生徒が協同的に学び、主体的に学習に参加ができる環境を整え、「わかった」「できた」と思えるような授業を展開していくことが重要である。そして授業を通して自己肯定感を高め自他を尊重し、自己実現を目指す生徒を育成していく必要がある。

(3) 自己肯定感を育む意義

日本青少年研究所が平成22年に実施した「日米中韓の高校生の比較調査」でも、「米国と中国の高校生は自己肯定感が強く、日本の高校生の自己評価が最も低い」と報告されている。日本の子供たちの自己肯定感や自尊感情は低下傾向にあり、世界の他の国々と比較しても低いことが明らかになった⁽⁵⁾。

自己肯定感が低いと自分に自信がもてず「できないからやめよう」という姿勢が芽生えてくる。このような中で「やればできる」などの声かけをしても、効果は少ないであろう。自己肯定感を高めるプロセスをしっかりとふみ、子どもたちと接していくことが学校の重要課題となっている。

学校では現状の改善を目的に、教育活動全般を通して自己肯定感を高めていこうという研究も多い。そこでは、子どもたちに意図的に人とのかかわる機会を多く設定し、自己や他者への気付きを促進させるエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを行うなど、様々な手立てが紹介されている。さらに自己肯定感と学力との相関関係も確認されており、自己肯定感を高めることで、生徒たちの学力が高まるという調査結果が出された⁽⁶⁾。

そこで、授業の時間において、生徒の自己肯定感を高め、社会認識を深めるための授業改善の必要性を感じた。学校生活において一番多くの時間を占めているのは授業である。つまり、授業改善を進めていくことが、学校改善にもつながり、生徒たちのより良い成長へとつながるものと考えたからである。

(4) アクション・リサーチによる授業改善

授業を改善し、学校を改善していこうという流れは現在現場のニーズとなっている。生徒への事前アンケ

ートや教師同士の授業研究の評価などでアンケートは多くの学校で取り入れている。だが、アンケートを実施するものの、それを具体的にどのように分析し、効果的に活用をする手法はあまり多いとはいえない。

さらに本校及び本地区においては抽出生の変容のみを検証し、その結果をまとめている教育実践論文や抽出生を追う授業分析が多い。だが、これも客観性が少ないものが多く、実践者の主観のみで記述されている、実践論文は多い。

そこで、授業分析を客観的に行う手法として、アクション・リサーチ（以下AR）の手法に着目した。

ARのプロセスの1つとして、佐野（2005）は以下の手順を示している⁽⁷⁾。

- ①問題の発見：直面している事態を扱う問題を発見する。
- ②事前調査：選んだ問題点に関する実態を調査する。
- ③リサーチ・クエスチョンの設定：調査結果から研究の方向性を導く。
- ④仮説の設定：方向性に沿って、具体的な問題解決の対策を立てる。
- ⑤計画の実践：計画に沿って実践をし、データを収集し、必要に応じて計画を変更する。
- ⑥結果の検証：対策の効果を検証し、必要なら対策を変更する。
- ⑦報告：実践を振り返り、一応の結論を出して報告する。

このような手順を踏み、「計画→実践→観察・省察→計画の修正→実践→観察・省察→計画の修正……」というサイクルを繰り返していくのである。日々問題意識を持っている教師が授業改善を進めるうえであたり前のように行っていることを、体系的に整理している研究法であるといえる。

三上は「授業内におけるさまざまな問題を解決するために、教師自らが中心となって、その授業に関するデータを収集・分析し、その問題の解決策を導き出していく研究方法⁽⁸⁾」としている。さらに倉本は「現在進行形の問題解決のプロセスを重視した研究であり、実践者自身の実践の質的向上を意図した研究である⁽⁹⁾」としている。このことから教育におけるARは教師のための、現在、目の前で起こっている問題を対象とした研究であるといえる。

さらに、矢守は「ARはインタビューや観察などの質的なデータ分析に親近性があるという主張があるが、事前事後の量的研究も重要である。量的研究を行う場合は、インタビューや自由記述などの質的なデータもとっておくことが望ましい⁽¹⁰⁾」としている。

以上のことから、ARは先に上げた本校及び本地区の授業分析の問題点を補足する授業分析法であるとも考えた。そこで、ARの手法を用いて、様々な授業分析を取り入れ、その是非を検討し、より質の高い授

業改善の手法を明らかにしていくことが重要であると考えた。

2 研究の構想

(1) 研究の目的

本研究の目標は以下の通りに設定した。

筆者が抱えた実感と事前調査によって浮き彫りとなった問題である「自己肯定感を高め、社会認識を深めるための授業改善」は可能であるかどうかを検証することが、本研究の目的である。その際、アクション・リサーチの手法を取り入れ、授業改善に与える影響を検討する。

(2) 授業で自己肯定感を高めるために

自己肯定感の構造について近藤卓（2010）は、他者との比較によって生じる感情（社会的自尊感情）と自分の中にある基本的に内在している、自分に対する無条件の肯定の感情（基本的自尊感情）の2つの側面から述べている。そして、基本的自尊感情という土台の上に社会的自尊感情が積み重なることで、個人を高めようとする自己肯定感が高まっていくとしている（図1）。この基本的自尊感情は、他者との感情を共有することで高まっていく⁽¹¹⁾。

つまり、他者と共に経験した居心地のよさや苦しさなどの感情の共有が、自己肯定感を支える重要な要素であるとしているのである。このことから、授業の中で他者とかかわりを増やし、授業の中で生徒が主体的に参加する場を設け、意見や思いを共有することが大切である。

支持的風土ができていく集団（互いに認め合う集団）では学習効果が大きい。文科省が示している[第3次とりまとめ]においては支持的風土を「隠れたカリキュラム」と記述されており、人権教育の基盤とされているこのような集団の中ではコミュニケーションも活性化し、次への学習意欲にもつながる。

倉本（2007）は支持的風土を集団に形成するには「小集団における活動の中で、コミュニケーション能力を高めていくことが不可欠である」と論じている。小集団の中で自分の居場所を感じ、自己のがんばりを肯定的にとらえるためにも、学習集団の中で支持的風土を作っていくことが自己肯定感の高まりにつながるものとする。図2のマズローの欲求階層説では、自己実現をするために、下位の欲求を満たし、上位の欲求をめざし成長欲求を増していく⁽¹²⁾。

このマズローの欲求階層説に則して、下位の欲求を

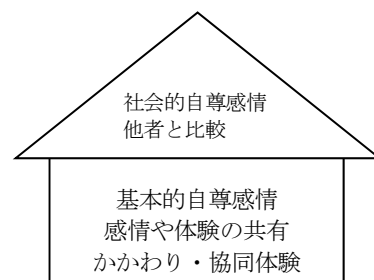


図1 近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学』(2010 金子書房) P22に筆者が加筆

満たしていくことができれば、生徒一人一人の自己実現に向けての欲求を育てることができるものと考ええる。さらに自己実現の過程において、安心・所属・承認の欲求を満たす必要があり、生徒の協同性や学級の支持的な風土が大きな影響を与えていると考える。

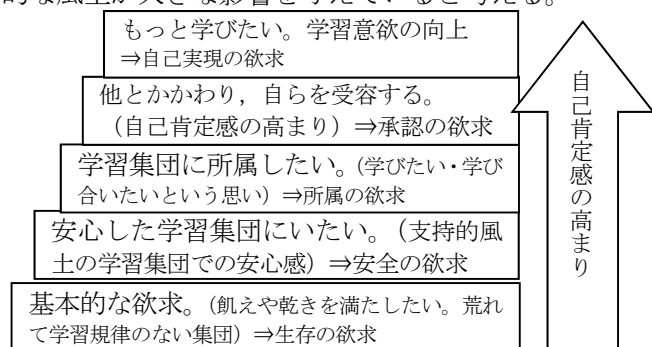


図2 倉本哲男『開発的生徒指導論と学校マネジメント』(ふくろう社 2007) P44に筆者が加筆

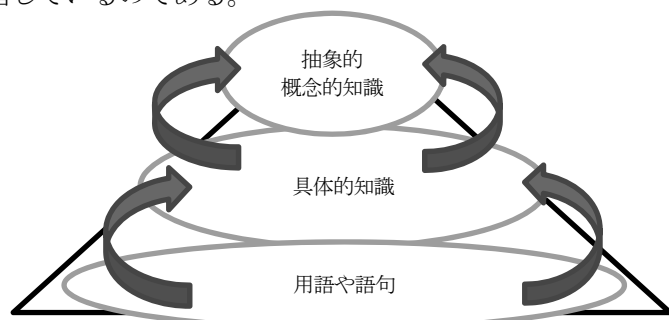
以上のことから、小集団による協同的な学びの機会を授業の中に組み込んでいくことが、自己肯定感を高める授業の実践に繋がっていくものと考ええる。

(3) 社会認識を深める授業をどうつくるか

棚橋(2010)は「社会認識は社会事象に対する事実認識である。この事実認識には様々な階層があり、概念的知識や記述的知識など、無数の知識が散在する。社会科の授業においては、これらの無数の知識をどのように結び付けて深化拡大させるかが重要である。さらに、社会の課題には複雑な要因が絡んでいることが多く、その因果関係や解決法を考えて、判断していくためには、多面的・多角的な考察を行い、知識を深めていくことになる。このように考えると、社会科の目標である『公民的資質』とは社会認識を育むことともいえよう⁽¹³⁾」としている。

以上のことから無数にある知識を構造化し、どのように結び付け発展させていくかは社会認識を育む上で不可欠なことであるといえよう。

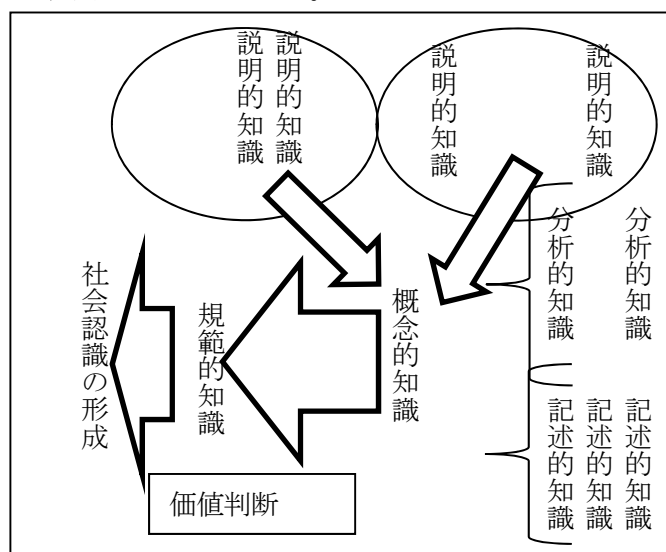
北(2011)は図3の知識の構造図を用いて、社会認識を育もうとしている。これは社会科における問題解決学習の反省から考えられたものといえる。つまり、「社会科における問題解決学習は知識の剥落というリスクも生じる⁽¹⁴⁾」とし、知識の構造化を図ることを提唱しているのである。



【図3 北俊夫の知識の構造図】

一方、岩田は「社会認識を通して、市民的資質を形成する」ことを社会科の目標の実現のためには必要であるとしている。つまり概念的知識の形成で終わるのでなく、さらに「規範知」の育成を目指している。規範知の形成は、徳目を教えるのではなく、規範知の選択能力を育成することを目標としている。規範知の中核となるのは未来予測能力である。未来予測をし、留保条件を加えながら自己決定(合理的意志決定)を行っていく。このような判断能力(価値判断)を磨いていくことで、社会科を通して生きる力を培っていくべきとしているのである⁽¹⁵⁾。

そこで、北と岩田の知識論をふまえて、図4のような過程で社会認識の形成を図ることが重要であると考えた。さらに、岩田・米田は社会認識の形成を、どのような言語活動を行って形成していくのかというモデルを示している。このモデルは橋本康弘が示した習得・活用・探究の場面における言語活動を、再構成して示したものを岩田一彦の知の構造の理論と対応して米田が整理したものである。実際の社会科の授業の指導案レベルにまで掘り下げた理論であるといえよう。図5にその理論を提示し⁽¹⁶⁾、本研究に生かしていく。



【図4 下館史嗣の社会認識の形成過程に筆者が加筆】

言語活動	言語活動の内容	言語活動例
読み取り	グラフ・資料から読み取る 記述的知識	WHAT ⇒資料から何が分かりますか。
解釈	資料に書いてあることを 解釈する 分析的知識	HOW ⇒資料からどのようなことが分かりますか。
説明	事象の因果関係を説明できる。 説明的知識・概念的知識	WHY ⇒なぜこうなったのですか。

論述	事象に対して根拠をもって、自分の考えを論述できる。 規範的知識	WHICH など ⇒あなたはどのように考えますか。
----	---------------------------------	------------------------------

【図5 岩田・米田の言語活動のモデル】

(4) 研究の仮説

自己肯定感を高め、社会認識を深めるための理論をもとに仮説を以下のように設定した。

研究の仮説

1時間の授業の中で、学ばべき知識を明確にし、協同的な学びの中で、一人一人が価値判断を行うような授業を繰り返していけば生徒の主体的な学習参加を促すことができるであろう。そしてその結果、自己肯定感を高め、社会認識を深めることができるであろう。

(5) 授業改善の手だて

研究の構想とそれを支える理論的根拠をもとに、授業改善の具体的な方法と授業分析の方法を以下のようにした。

手だて① 知識の構造図の作成

知識の構造図を作成することで、教材研究の一助とした。この1時間でどんな知識を習得し、どのような概念を獲得するのかを明らかにしながら学習を進める。指導案上にも習得すべき知識を明記した。

さらに、評価をするときの基準としても活用し、規範的知識を評価するためにも有効であると考えた。

手だて② 資料提示の工夫

資料提示には導入の資料、押さえの資料、揺さぶりの資料の3つの種類を用意して指導案上に位置付けた。

【導入の資料】

授業の最初に提示する。ここでは知的好奇心を刺激するような資料を用意して、1時間の意欲付けとする。ここで生徒の学びたいという気持ちを引き出したい。

【押さえの資料】

授業の中盤に提示する。ここでは生徒が追究で得た知識を、説明的知識(具体例を使って概念を説明する)ができるような資料提示を行う。生徒は個々で断片的につかんでいた記述的知識を総合化し、より高次の知識へと高めていくことをねらっている。

【揺さぶりの資料】

授業終盤に提示する。後半で生徒の意欲の減退を防ぐために行うとともに、新たな社会事象に対する見方を広げることをねらっている。

手だて③ 学習形態の柔軟化

個人追究→小集団による交流→個人の修正→全体討論という形を必ず学習の中に取り入れる。(シンク・ペア・シェア) さらに、小集団学習を行うときにはランドロビンという手法を取り、一人一回は自分の意見を言い、仲間に聴いてもらう機会をつくる。このことが

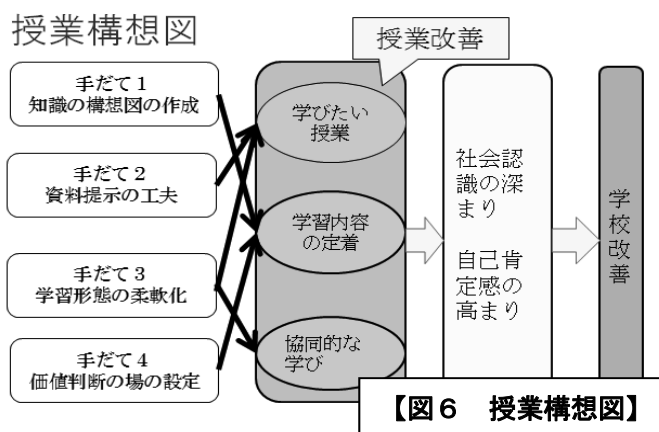
生徒の事象への見方を広げていくことにつながるものとする。

手だて④ 振り返りで価値判断の場を設定

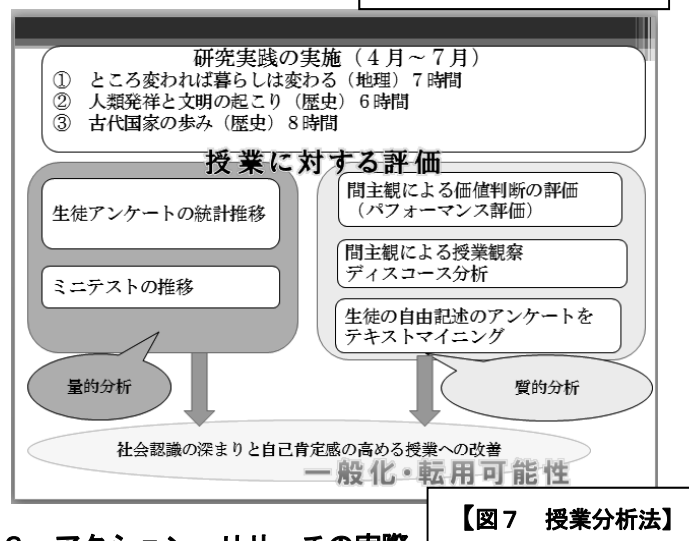
授業の終末には価値判断(意思決定)を行う。このことにより、習得した知識し、規範的知識を育成する機会とする。さらに、次の学習課題につなげるために、「このあとどうなるか」などの問いを用いて、未来予測をさせる場合もある。

(6) 授業構想図と授業分析法

本研究を明らかにするために、授業の構想(図6)と授業の分析(図7)について以下のようにまとめた。



【図6 授業構想図】



【図7 授業分析法】

3 アクション・リサーチの実際

(1) 1年次の先行研究とその課題(問題把握)

研究1年目では、本校の現状と生徒の実態から、社会認識を深め、自己肯定感を育むという目的で、授業改善を行った。

研究単元は1年生地理の「世界の諸地域」で行い、2013年9月～12月の授業分析を行い、その成果を検証した。手だてとしては授業における小集団思考と全体思考の場を位置付け、社会認識と自己肯定感を伸ばしていこうとしたのである。

このとき用いたのは問主観による、授業分析である。フッサーは主観を客観に近づける方法として問主観(Triangulation)を提案している。倉本は質的研究に

おいては授業観察・日記等の分析において、間主観を用いた分析を行うことの重要性を指摘している⁽¹⁷⁾。本実践では研究者の協力のもと、筆者の授業分析を行った（資料2）。

資料2 2013.12.3 国塚実践を参観しての検討

	自己肯定感（支持的風土）	社会科の学力
筆者の授業後の反省（国塚）（主観）	集団の中で、支持的風土の形成は感じている。どの子も、最後まで難しい課題に粘り強く取り組むことができるようになった。	一人一人が調べ学習や意見発表ができるようになってきたのは感じる。しかし、知識の押さえの部分では不安なところも感じる。習得と活用の場面のメリハリが難しい。
研究者の授業分析（萩原）	教師支援によりすべての子を授業に参加させようとしている。授業で鍛えられていることが分かる。	発問の仕方が曖昧なところがあった。生徒の思考が深まるためにはきちんと知識を押さえていかないとけない。押さえが曖昧なところが見られた。せっかく良い雰囲気できているので、そういう社会科の学力についても検討してもらいたい。
研究者の授業分析（中妻）	支持的風土は確認できるが、学びの質においてはまだまだ育っていない。小集団思考の形式はできているので、今後は学びの質を高めるとよい。	具体から抽象への思考のジャンプができていない。今後はその辺を意識させながら学ぶと思考の質が高まる。
実践者の授業分析（校長）	学び合う姿が見られている。小集団の学習が学級経営に良い影響を与えていることが伝わった。	資料を粘り強く調べている姿が印象的だった。一人一人が自分の意見を論述できていた。

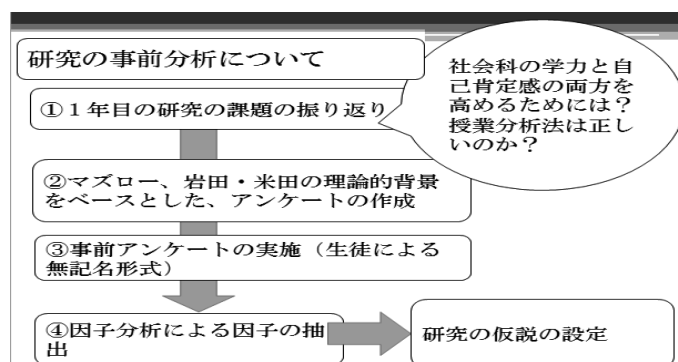
授業後の研究協議の話題は自己肯定感と社会認識（社会科の学力）の2つの側面から討議を行った。筆者・研究者とも、社会認識の育ちに課題を感じていることが伺えた。小集団学習を用いたことで、自己肯定感は育ってきていることはすべての参観者には実感として残ったようだが、社会認識の深まりにおいては現状のままでは手だてが不足しているのではないかという課題が残った。そこで、2年目の研究では自己肯定感と社会認識の2つをいかに同時に伸ばしていくのかという課題をもって、授業改善を進めることにした。さらに、より客観的に授業分析を行うために、より様々な授業分析を取り入れていくことも課題となった。

※ 1年目の課題と2年目の研究の問題把握

- ①社会認識を深めるための授業改善をいかに進めていくべきか追究をする。
- ②授業改善を進めるための、客観性のある授業分析の方法や仮説の検証法の検討をする。

(2) 研究の計画（事前調査）

① 事前調査の計画



② アンケート作成について

生徒の実態を捉えるため、アンケートを行った。項目については以下のとおりである（資料3）。

資料3

アンケート項目
1 わたしが間違った意見を言っても、誰も冷やかさないと思う。
2 クラスは安心して学べる授業がされていると思う。
3 友達と授業をしていてとても楽しいと感じる。
4 このクラスで学べてとてもよかったと思う。
5 グループでの話し合いを行うことが楽しく感じる
6 自信をもって意見を述べるができる。
7 もっと人の意見を聴きたいと感じることがある。
8 時間があればもっといろいろなことを学びたい。
9 疑問に思うことがあればもっと調べたいと思うことがある。
10 次の社会科の授業を受けるのが楽しみと思うことがある。
11 資料からたくさんの気付きを発見することができる。
12 資料の特徴を説明することができる。
13 自分の意見を資料から根拠をもってつくることができる。
14 1時間の授業を受けて自分の意見をまとめることができる。
15 友達の意見を聴きながら自分の意見をよりよいものにしようと思えることができる。
16 たくさんの資料や根拠から自分なりの意見をつくるすることができる。

項目1～10は自己肯定感に関する項目である。ここには図4で示したマズローの理論を取り入れている。項目1～2は安心の欲求、項目3～5は所属の欲求、項目6～7は承認の欲求、項目7～10は自己実現の欲求である。

項目11～16は社会認識の項目であり、図2の岩田と米田の理論を背景にしている。項目11は読み取り、項目12は解釈、項目13～14は説明、項目15～16は論述の段階とした。

現場における事前アンケートはどちらかというと意欲的な側面が多い。そのため、アンケートを活用した分析が難しい側面がある。そのため、理論的な背景をもとに、アンケート項目を作成することで、より一般化や転用可能な結果が得られると考えた。

③ 事前アンケートの分析

アンケートの結果の因子分析を行った（資料4）。因子分析を行うことで、各項目の相関関係も分かり、仮説の設定に有効であると考えたからである。

資料4 因子分析と相関関係 2014. 5. 21 128名に実施

	成分1 学習意欲	成分2 自己肯定感・支持的風土	成分3 社会認識
たくさんの気付きを発見できる	0.83	0.37	0.53
もっと学びたい	0.82	0.50	0.62
疑問をもっと調べたい	0.78	0.49	0.47
次の社会が楽しみ	0.78	0.45	0.40
もっと人の意見を聴きたい	0.78	0.55	0.55
友達と授業をして楽しい	0.50	0.89	0.33
このクラスで学べてよかった	0.53	0.81	0.35
安心して学べる	0.40	0.80	0.48
グループでの話し合いが楽しい	0.62	0.71	0.41
誰も冷やかさない	0.29	0.69	0.57
自分の意見をまとめることができる	0.62	0.62	0.79
意見を資料から根拠をもってつくる	0.67	0.22	0.79
資料の特徴を説明する	0.69	0.23	0.77
たくさんの資料や根拠から意見をつくる	0.43	0.59	0.76
意見を述べるができる	0.43	0.34	0.75
友達の意見を聴き自分の意見をよくなる	0.37	0.67	0.72

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

成分相関行列			
成分	学習意欲	自己肯定感・支持的風土	社会認識
学習意欲	1	0.46	0.56
自己肯定感・支持的風土	0.46	1	0.46
社会認識	0.56	0.46	1
因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法			

因子分析の結果3つの因子が抽出できた。因子1は学習意欲に関する項目。因子2は集団の中での自己肯定感・支持的風土に関する項目と捉えられる。因子3は社会認識に関する項目と捉えられる。そして、因子1と因子2の相関は高く、因子1と因子3の相関も高い。このことから因子1の学習意欲を向上できることができれば、自己肯定感と社会認識が高まっていくのではないかと考えた。この結果から、社会認識を深め、自己肯定感を高める授業は可能であることが確認できた。

学習意欲は、教材研究を深め、教材の提示の仕方の工夫をし、生徒にとってわかる授業や学びたい授業を実現することで高まっていくものと考え。さらに社会認識を高めるために、価値判断を伴った課題解決学習とそれを生徒一人一人が共有体験を積みながら協同的に検討し合える場面も設定していくことが大切であると考えた。また、1年目の研究では小集団思考と全体思考を取り入れながら学習を進めていくことが、自己肯定感を支えていくことも明らかになったので、この理論も取り入れていくことにした。

(3) リサーチクエストの設定

事前調査によって、研究の方向性が明らかになり、リサーチクエストを以下のように定め、2年目の研究を進めることにした。

リサーチクエスト（研究2年目）
社会認識と自己肯定感の2つを伸ばすための授業の方法を明らかにする。

そして、先に述べた研究の仮説に則して研究を進めることにした。

(4) 授業の実践

授業実践は3つの単元で行った（「ところ変わればくらしは変わる」「人類発祥と文明の起こり」「古代国家の歩み」）が、今回は古代国家の歩みを紹介する。なお実践期間は2014年4月～9月とした。

① 指導計画—古代国家の歩み—8時間完了—

- ・太子は偉大な人物か—聖徳太子の政治—
- ・唐に追いつけ—大化の改新—
- ・国力増強のために—大宝律令—
- ・のしかかる租庸調—奈良の農民の負担—
- ・命がけで花開いた文化—天平文化—
- ・桓武の挑戦—平安京遷都と蝦夷遠征—
- ・道長の願い。極楽浄土—摂関政治と国風文化—

・古代のまとめ—天皇の力の推移—

② 授業の実践

タイトル	授業の実践
太子は偉大な人物か	豪族の対立が激しい中、争いのない国を目指すため太子は天皇中心の国づくりをめざす。だが、太子は政治改革の途中で突然の引退。そこで生徒に「太子は偉大な人物だったと言えるのだろうか」と考えさせた。
唐に追いつけ	隣に強国である唐ができていく。生徒には「中大兄皇子はどのように国を強くすればいいのか」という問いを考えさせた。そして大陸に夢をかけて白村江の戦い。しかし、日本軍は惨敗。そして日本初の内乱である壬申の乱。改革はここで止まってしまうのかとも問いかけた。
国力増強のために	唐に敗れた日本。生徒には「どうすれば日本は唐に追いつけるのか」という問いを考えさせた。実際の日本は律令を導入化し、天皇の命令は隅々まで発することができるようになる。この後、天皇の力は強まったのかとも問いかけ、次の時間につなげた。
のしかかる租庸調	のしかかる租庸調。農民の相次ぐ逃亡。今まで作ってきた天皇中心の国づくりに一つの転換点が訪れる。「当時の天皇だったら、農民の逃亡を防ぐためにどうすればいいのか」と問いかけ、その後の天皇の諸政策についても考えていった。
命がけで花開いた文化	命がけで唐に渡る留学生。この命令をなぜ留学生はうけなくてはしなかったのだろうか。さらに古事記による、天皇神話。「当時の人々は天皇のことをどのようにとらえていったのだろうか」と生徒に問いかけ、天皇の力を軸にして、天平文化をとらえていった。
桓武の挑戦	平安楽土の都を建設した桓武天皇。次なる敵は蝦夷。この蝦夷征伐を朝廷側と蝦夷側の2つの資料から検討した。そして生徒には「桓武の蝦夷征伐は、天皇の力を高めるために必要なことだったのだろうか」という問いを考えさせていった。
道長の願い。極楽浄土	平安中期の貴族社会。天皇家の力を利用した藤原氏の政治を学んだ。「道長の力の源は何か。そして死の直前にして道長は何を阿弥陀仏に願ったのか」という問いを生徒は考えていった。
古代のまとめ	単元のまとめとして、天皇の力の推移をもとに時代を大観した。生徒たちはグラフで天皇の力の推移を表現した。

(5) 授業分析（仮説の検証）

① 知識の構造図の作成⇒ミニテストによる推移

--	--

このテキストマイニングでは1組、2組、6組、7組の4クラスの傾向が分析できる。構成クラスター7は「資料のおもしろさ」にかかわる要素がある。ここに近い、1組と2組の生徒にとっては、提示した資料に興味深く捉えていったことが伺える。さらに構成クラスター2には写真や地図などのキーワードが入っており、「提示資料」を指す言葉であると考え。そう考えると6組の生徒にとっても資料をもとにみんなで話し合っている授業がとてもわかりやすかったという記述が多かったといえる。構成クラスター3と5は「教科書を使って話し合い、グループでまとめ合う」というキーワードが多かった。ここに近い7組の生徒は教科書や資料をもとに話し合いを進め、自分の認識を深めていくときにわかったという感覚をもつようである。

このことから4クラスとも記述の差異はあるが、資料が生徒の関心を高め、話し合いが深まるために有効的に作用したことが伺える。

③ 学習形態の柔軟化⇒授業観察・ディスコース分析

学習形態の柔軟化のさいには、協同学習の手法を取り入れた小集団学習を積極的に取り入れた。特に取り入れたのは、以下の2つの手法である。

ラウンドロビン

→話し合う順番を決めて、その順番にそって議論を繰り返す。意見をまとめない。

シンク・ペア・シェア

→個で考え、小集団→全体と意見を交流しあい、授業の総括で再び個で考える。

《ラウンドロビン》

「あなたは遣唐使派遣の命令を受けますか」（資料10）という学習課題について、グループで話し合っているときの記録である。A→B→C→Dの順番で話し合いを続け、みんなが学びに参加できるようにしているし、意見をまとめないため、否定的な話し合いにはなっていない。さらに話し合いの様子を見ると、Aは当初遣唐使派遣命令を受け入れるのに反対であったが、何周かしていく中で、「出世したいけど、困るよね」と意見を変化させてきている。つまり、自分の考えだけでなく、友達の意見を聴き合うことで、社会事象への見方を広げていっていることが読み取れる。

資料10 ラウンドロビンの授業記録

《あなたなら遣唐使派遣の命令を受けますか》

～ラウンドロビン～（最初に一通り意見を述べ合う）

A：わたしは行きたくない。死ぬ可能性が多いもん。

B：ぼくもそうかな。遣唐使をしてこんなに死んでるし。

C：ぼくは出世したい。だからいく。生きて帰ってきたら大成功だし。

D：天皇の命令は絶対じゃあないの。だからわたしは殺されるかもしれない。だからいく。

A：見つからなければ助かるでしょう。わたしは逃げるよ。

B：逃げたいけど。大丈夫なのかなあ。どうせ死ぬなら、命を懸けてみればいいと思うけど。

《シンク・ペア・シェア》

この手法は個で考え、小集団で話し合うなど、学習形態を柔軟に変えていく手法であるといえる。筆者は本実践の「個→小集団→個→全体→個」という学習形態をとった。個で考え、小集団で見方を広げ、さらに一度話し合ったことを個で整理する。そしてそこで生まれた考えを全体場で伝え合い、最後の振り返りは再び個に戻した。多くの生徒たちの振り返りからは「〇〇の意見が参考になった」となどという記述が確認できた。この手法を継続していくことで、学習の質は確実に高まっていくことが確認できた。



写真1 ラウンドロビンと全体思考による話し合いの様子

この小集団学習について、筆者の授業を見ていただいた、先生たちの分析は以下のとおりである（資料11）。

資料11 小集団学習の様子 間主観にて分析

	小集団の形態についての授業観察について（6月の研究協議）
筆者の授業分析（国塚・主観）	授業についていけない生徒もだいぶ小集団学習に参加するようになった。意見が活発になるようになった。4月から繰り返したことが成果となった。
研究者の授業分析（萩原）	昨年度から引き続いて見てきたが、今年の生徒にもとてもいい効果をもたらしている。じっくりと話を聴き合う姿がいい。意見を発展させている生徒も多い。（5月）前回見たよりも意見が活発だった。これを続けていくと、クラスの経営にいい影響を与えていくであろう。規律も身に付いている。（6月）
研究者の授業分析（倉本）	外国籍の生徒もとても楽しそうだった。普通外国籍の生徒は日本史は毛嫌いする傾向がある。それでも楽しんでいるということは支持的風土の形成に有効だったのではない。（7月）
実践者の授業分析（本校校長）	聴き合う姿がとてもやさしい。こういう実践をぜひ継続させてほしい。Aくんも受け入れられていた安心した。（6月）
実践者の授業分析（同僚職員）	自分の実践に取り入れやすいのがラウンドロビンだと思う。気軽にできるから、ぜひやってみたい。（5月）前回よりもラウンドロビンがスムーズになっている。小集団のあとに全体発表はメリハリがあっている。

資料11を見ると、小集団学習をこなしていくことで、ラウンドロビンが活発になっていることが伺える。それぞれが否定しないで話を聴いてくれる支持的風土の形成に大いに役立っていると言えよう。

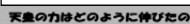
④ 価値判断の場を設定⇒間主観による評価

「～はどうなったのだろう」というWhichの問いで価値判断を迫った。特に振り返りの場面で行うことで、授業の総括をし、知識を活用する場となると考えたからである。以下に本実践で行った問いを示す（資料12）。

資料12 価値判断の問い

学習課題	発問（WHICH～?）
太子は偉大な人物か	太子死後、天皇家の力は強まったといえるだろうか。
唐に追いつけ	大化の改新後、天皇家の力は強まったといえるのだろうか。
国力増強のために	大宝律令成立で天皇家の力は強まったといえるのだろうか。
奈良の都の光と影	聖武天皇の私財法成立により、天皇家の力は強まったといえるのだろうか。
命がけで花開いた文化	遣唐使派遣、さらに古事記の神話などにより、天皇家の力は強まったといえるのだろうか。
桓武の挑戦	蝦夷討伐により、天皇家の力は強まったといえるのだろうか。
道長の願い。極楽浄土	道長死後、天皇家の力は強まったといえるのだろうか。

資料 13 A生のまとめ（天皇の力の推移をグラフ化）



ノートを読み返したら、「天皇に従わなかったら罪」だという⑤の時期が一番強いと思った。天皇からの命令を農民が恐れているということは、天皇の強さでもあるから④も強いと思う。②や⑦は天皇を利用していてもいいので、天皇の力は弱いと思う。(生徒の単元のまとめの記述 資料13)

資料 15 は生徒の価値判断の質的変容をグラフ化したものである。この際、客観性に近づけるため、同僚教師の協力で、価値判断にかかわる記述を評価した。

ここからは少しずつA評価が増えてきており、価値判断のプロセスの際に多面的・多角的に判断材料を集め、自分の意見を構築していったことが伺える。

価値判断の評価基準（資料 14）

A評価：概念を理解でき、それに応じた多面的・多角的な価値判断ができる。

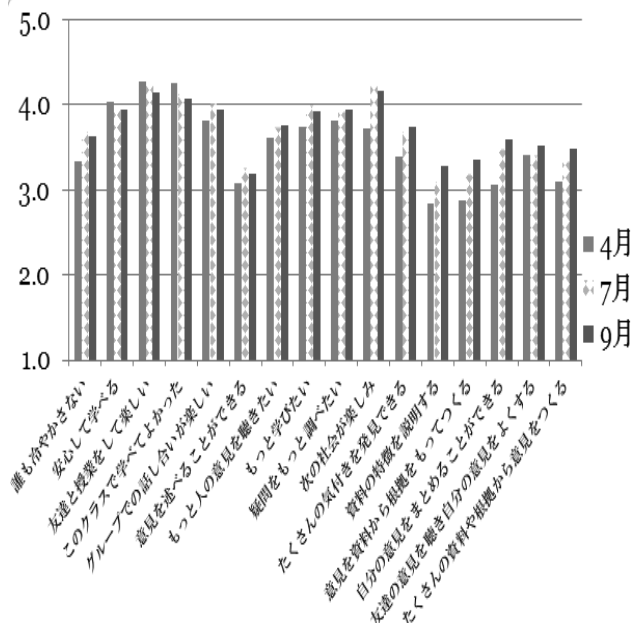
B評価：概念を理解でき、それに応じた価値判断ができる。

C評価：概念の理解ができていない。



※ アンケート調査から

資料 16 自己肯定感・社会認識のアンケート実施人数 127 名



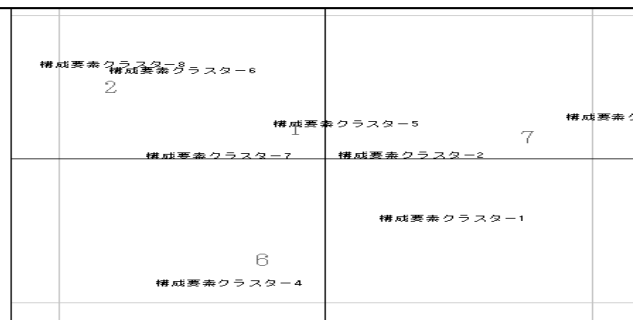
資料 16 を見ると、全体的にアンケート項目は向上している。「たくさんの気付きが発見できる」「自分の意見をまとめることができる」など、社会認識に関する項目もすべてにおいて上昇してきている。資料の提示の工夫や知識の構造図などを用いて、生徒が価値判断の場を設定し、話し合いを繰り返してきた成果であると考える。

さらに、「誰も冷やかさない」「グループでの話し合いが楽しみ」だという項目の数値も伸びている。このことから生徒たちの自己肯定感が高まり、クラスの中で支持的な風土がつけられている様子がうかがえた。このことが、「意見を述べることができるようになった」「次の社会科が楽しみ」「もっと学びたい」などの数値が高まった要因であると考ええる。

このように授業改善により、生徒の学習意欲も高まったことで、社会認識が深まり、自己肯定感の高まりへとつながっていたとアンケート結果や相關関係からも考えることができる。このことから仮説の妥当性が判断できた。

②筆者の社会科の授業の変容（テキストマイニング）

資料17 筆者の社会科の授業はどんなものか 記述アンケート 2014. 7. 14 127名実施



	構成要素ク ラスタ-1	構成要素ク ラスタ-2	構成要素ク ラスタ-3	構成要素ク ラスタ-4	構成要素ク ラスタ-5	構成要素ク ラスタ-6	構成要素ク ラスタ-7	構成要素ク ラスタ-8
1.	いろいろ	たくさん	挙手	語句	まとめ	いろいろ な	おもしろ い	おもしろく
2.	アニメ	みんな	雑学	クラス	黒板	ノート	たまに	絵
3.	最初	わかり	雑談	社会	写真	プリント	にぎやか	学習
4.	発言	ポイント	手	社会科		図	一つ	地理
5.	発表	意見	前	小学校			授業	豆知識
6.	話し合い	教科書	全員発言	真剣			説明	勉強
7.		参加	率	想像			先生	
8.		資料		雰囲気			歴史	
9.		生徒		話				

「筆者の社会科の授業はどんなものか」という問いで記述アンケートを行った（資料17）。1組はクラスター2・5・7に近く、生徒が主体的に学びに参加し、和やかなムードであるという記述が多かった。さらに話し合いが多いことも記述されており、みんなで意見を練り合う授業ができていることが分かった。2組はクラスター6と8に近い。資料のおもしろさに対することや学びに対する知的好奇心が高まっていることが伺えた。6組は真剣に学び合う雰囲気や話し合いの授業の多さ、小学校より学びが深いという記述が多かった。さらに想像というキーワードからは価値判断の際には様々なことを考えている様子がうかがえた。7組はクラスター2とクラスター3に近い。全員発言や資料を使って意見の述べ合うという記述が多かった。

以上のことからすべてのクラスとも支持的風土が形成されているとともに、話し合いを通じて社会認識を深める授業ができていることが伺えた。

4 研究の成果と課題（実践の振り返り）

本研究では自己肯定感を育み、社会認識を深めようと授業改善を行っていた。本研究で明らかになった成果と課題については以下の通りである。

(1) 研究の成果

- ・価値判断の場面を多く設定することで、生徒は事象を双方向から追究をすることになる。そのため、多面的多角的に思考を促すことにつながった。
- ・小集団学習で用いたラウンドロビンでは、生徒の思考を広げるだけでなく、生徒同士が互いに認め合う支持的風土をつくるうえでも欠かせないものとなった。中学校においてはこれをどのクラスでも行っていくことで、学年経営や学校経営に良い影響を与えていくことになるかと考える。
- ・ARの手法で授業改善を行ったところ、教師同士が課題を共有化し合い、自分だけでなく、他の教師の授業改善の意識が高まった。

(2) 研究の課題

- ・価値判断を問う場面を、どの単元でも取り入れていくための教材研究をさらに進めたい。
- ・小集団学習をどのように毎日の通常授業の中で位置付けていくのかを模索したい。さらに他教科における転用可能性の追究していきたい。

- ・今後もARによる研究を進め、より現場で活用しやすい研究法を提案していく必要がある。

〇註

- (1) ベネッセ教育研究開発センター第4回学習基本調査 2007
- (2) 北俊夫 『社会科学力をつくる“知識の構造図”——何が本質かが見えてくる教材研究のヒント』明治図書 2011 pp12-17
- (3) ベネッセ教育総合研究所「高校受験調査」2011
- (4) ベネッセ教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」2007
- (5) 「日米中韓の高校生比較調査」日本青少年研究所 2012
- (6) 島根県雲南市「全国学力調査結果」「児童生徒生活実態調査」2013
- (7) 佐野正之編『はじめてのアクション・リサーチ—英語の授業を改善するために—』2006 大修館書店 pp6-7
- (8) 三上明洋「アクション・リサーチ入門」

<http://engserve.edu.mie-u.ac.jp/~eg6.003/AR/ar1.html>

2014. 10. 3 検索

- (9) 倉本哲男「日本教育経営学会発表資料」2010
- (10) やまだようこ「質的心理学の方法を——語り聞く」新曜社 2007 PP179-189 矢守克也（2007）
- (11) 近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学』2010 金子書房 pp21-25
- (12) 倉本哲男『開発的生徒指導論と学校マネジメント』ふくろう社 2007 pp30-44)
- (13) 棚橋健二 児玉康弘 梅津正美 社会認識教育学会編『中学校社会科教育』学術図書出版社 2010 PP23-25
- (14) 北俊夫 『社会科学力をつくる“知識の構造図”——何が本質かが見えてくる教材研究のヒント』(明治図書 2011) pp19-28
- (15) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言』2001 明治図書 P9 3
- (16) 岩田一彦・米田豊『言語力をつける社会科授業モデル』2009 明治図書 pp26-30
- (17) 倉本哲男「自律する学校づくり」授業資料（2013 前期）

〇参考文献

- ・下館史嗣「資料の役割を明確にした社会科授業の設計」（兵庫教育大学修士論文 2011）
- ・北俊夫 『社会科学力をつくる“知識の構造図”——何が本質かが見えてくる教材研究のヒント』(明治図書 2011)
- ・棚橋健二 児玉康弘 梅津正美 社会認識教育学会編『中学校社会科教育』(学術図書出版社 2010)
- ・岩田一彦・米田豊『中学校社会科「新教材」授業設計プラン—新旧比較で授業はこう変わる—』(明治図書 2009)
- ・岩田一彦・米田豊『言語力をつける社会科授業モデル』(明治図書 2009)
- ・岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言』(明治図書 2001)
- ・森分孝治『社会科教育研究—方法論的アプローチ入門』(明治図書 1999)
- ・安井俊夫『発言を引き出す社会科の授業』(日本書籍 1986)
- ・無藤隆・嶋野道弘編『平成 20 年度学習指導要領対応新しい教育課程と学校づくり 2 巻—確かな学育の育成』(2008 ぎょうせい)
- ・倉本哲男『開発的生徒指導』(ふくろう出版 2007)
- ・近藤卓「生きる力を支える自尊感情」『児童心理』第 61 巻第 10 号（金子書房 2007）
- ・近藤卓『自尊感情と共有体験の心理学』(金子書房 2010)
- ・佐藤学『学校の挑戦—学びの共同体をつくる』(小学館 2006)
- ・佐野正之編『はじめてのアクション・リサーチ—英語の授業を改善するために—』2006 大修館書店
- ・やまだようこ「質的心理学の方法を——語り聞く」新曜社 2007

〇参考資料

- ・「日米中韓の高校生比較調査」（日本青少年研究所 2012）
- ・「全国学力調査結果」「児童生徒生活実態調査」（島根県雲南市 2013）
- ・「高校受験調査」（ベネッセ教育総合研究所 2011）
- ・「第4回学習指導基本調査」（ベネッセ教育研究開発センター 2007）
- ・「評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（中学校社会科）国立教育政策研究所 2013

付記

教職大学院では様々な授業を受けながら、多くのことを学ぶことができた。学ぶ機会を与えてくださった、愛知県教育委員会、西三河教育事務所、知立市教育委員会、そして学ぶ環境を整えてくださった現任校校長をはじめ、研究に協力していただいた同僚の方々、大学でご指導くださった萩原孝先生、中妻雅彦先生、倉本哲男先生をはじめ、多くの方々に支援をしていただいたことを心より感謝したい。